

技術士の目

いわてを見る

第13回

走りながら想う～地元や地域の魅力に目を向けて～

菅原 弘（総合技術監理部門、建設部門、応用理学部門）

10月も半ばを過ぎ、盛岡近郊でも秋が大分深まって来た。そんな折、休日にはぼっかりと時間が空いた。その日は、割りと暖かく日差しもあった。なにより、随分しばらく怠け気味で運動不足になっていたのので、思い立って、久しぶりにランニングに出ることにした。

私は、防寒対策をそれなりに着込み、家を出て、軽くストレッチをして、矢巾温泉方向へ5km弱の道のりを走り出した。南昌山の麓から広がる扇状地地形によって齎された緩やかな登り坂がずっと続いた。しかし、暫くして、町道（西部開拓線）の手前に来ると、その場所だけ急な登り坂になった。北上低地西縁断層帯（花巻断層帯）にあたる場所である。岩手県の調査によると、最新活動時期が約4000年前、活動間隔が3800年から2万3000年とされる活断層である。西側が東側に対して相対的に隆起する逆断層で、この場所は、まさに断層崖であろう。私は、4000年前の大地震の痕跡の急坂を、一足一足、走り、登った。

汗の量も徐々に増し、やがて坂を登り詰め、谷の出口、扇状地地形の扇央部に位置する矢巾温泉に到達した。宮沢賢治が愛し、小説「銀河鉄道の夜」の舞台ともされる南昌山のまさに懐である。近くの河原には、賢治の歌碑が建つ。「まくろなる 石をくだけば なほもさびし 夕日は落ちぬ 山の石原」私は、ハンマーを翳して石を割る、地質を探求する賢治の姿と眼差しを思い描いた。

麗らかな日差しは、いつもなら来た道に戻るところを、少し遠回りをして戻ろうかという気持ちにさせてくれた。私は、煙山ダム方向に向かい、今度は断層崖による急坂を駆け下った。

煙山ダムは、竣工後50年余、灌漑・治水を目的とした堤高21.8mのアースダムである。長さが528.5mある堤頂の上の道路は、当然のこと平坦なのでラン

ニングには持って来いで走りやすかった。そして、その堤頂道路の先は、対岸にある城内山へ1.5km程のハイキングコースに続いていた。私は、ダム^{じょうないさん}の湖面越しに色づく南昌山に背中を押されて、さらに城内山に向かうことにした。

城内山は、標高328.3mで、東北自動車道で矢巾PA辺りを走行していると西方に見える、山頂に展望台があるこんもりと小高い丘陵である。私は、新奥の細道、和味への分岐から1.2kmの落ち葉が敷かれたハイキングコースを、ペースを落としてゆっくりと走り、登った。もう既に疲労が足に溜まっていた。案の定、展望台まで500mの標識が立つ辺りから、登り坂が一層急になり、汗が噴き出し、息が上がった。そして、遂に足も止まった。それでも、途中、安山岩の岩塊の上に建つ薬師堂を仰ぎ小休止し、その後、歩いたり走ったりを繰り返しながら、無線中継所を過ぎ、ようやく立派な展望台のある山頂に到達した。

展望台からは、北に岩手山、北上山地を背景に盛岡から花巻にかけて、美しい散村形態の田園風景や、開発盛んな矢巾町近郊などが眼下に見渡せた。案内板によれば、城内山は足利尊氏の時代の奥州管領斯波氏の家臣の館である煙山館があった山でもある。古人もここから領国を俯瞰したのであろうか。私は、一息ついて、城内山を下り、家路に着いた。

その日のランニングは思い掛けずタフなものになってしまった。それでも、地元や地域の持つ魅力にまた一つ触れ得たような気持ちにもなった。それは、“ローカルな魅力”で、小さな魅力だが長い時間の糸に紡（つむ）がれた素晴らしい魅力である。私は、こんなふうに、走りながら見たり感じたりする地元や地域の魅力を、それが小さな魅力であるかもしれないが、できるだけ後世に伝え残すことが大切であろうと想う。